ユスラウメ台とモモ品種の親和性

ユスラウメ台木を用いたモモ栽培では、品種により親和性が異なり、またユスラウメの系統によりその差が大きくなる。このことは、国内でわい性台木の研究が始まった頃から指摘されていたことであるが、モモの安定栽培を行うためには親和性の良い品種を吟味して取り組む必要がある。現在ユスラウメと親和性の良い品種の探索及びユスラウメと親和性は良くないものの経済性の高い品種の栽培の可否についても検討しており、それらの成果の一部を報告する。

場内ほ場で植栽しているユスラウメ台２０品種、共台１４品種について、平成８年（３年生樹）から１１年（６年生樹）まで幹周の肥大を測定した（図１、２）結果では、６年生樹の段階で、枯死衰弱が激しい品種は見られなかったものの、ユスラウメ台に対して親和性がよいと考えられる品種は武井白鳳、みさか白鳳、あかつき、千曲白鳳等であった。一方、親和性が疑問視される品種としては八幡白鳳、やまなし白鳳、清水白桃等であった。ただし、親和性を判断する上では、さらに多くの要因について継続調査する必要がある。

従来からユスラウメ台‘川中島白桃’は枯損樹の発生が多いなど親和性が疑問視されているが、熟期が盆前の需要期になること、糖度、流通性等に優れることから、ユスラウメ台を活かす方法として親和性品種を中間台に用いる栽培法について検討した。この結果、千曲白鳳を中間台として用いることにより樹体肥大が優れ（図３）、養分吸収も良くなり、果実品質、熟期についても通常のユスラウメ台栽培と変わりないことが分かった。

果樹試では、現在高品質安定生産を目指すためユスラウメ優良系統の大量増殖技術の開発に取り組んでいるところである。

（落葉班　主任研究員　矢野　隆）

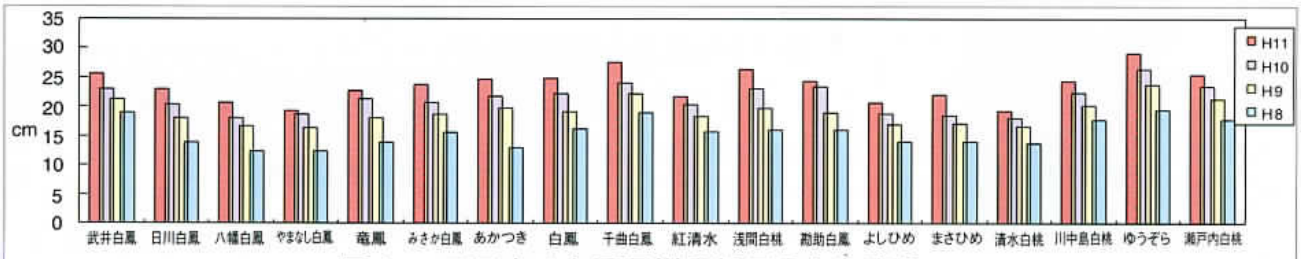

図１ ユスラウメ台モモ樹の幹周の年次変化

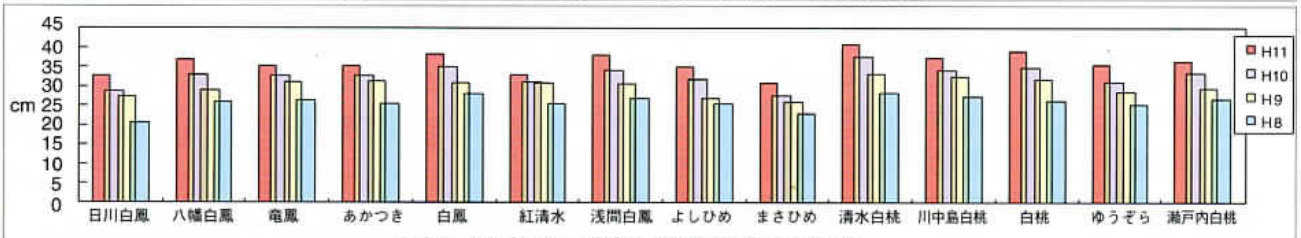

図２ 共台モモ樹の幹周の年次変化

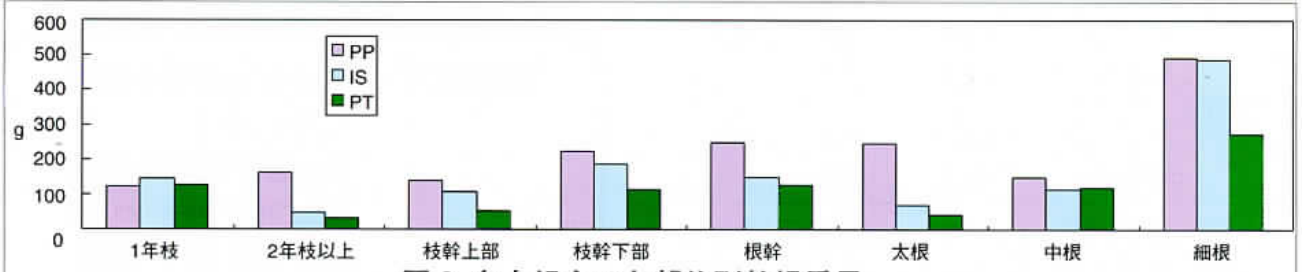

図３ 台木組合せと部位別乾燥重量